

The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes.
By Frederick C. Crews. New York: Oxford University Press, 1966.

松 山 信 直

この書物は、作家 Hawthorne とその作品にフロイド的解釈を企てようとする研究である。こう聞いただけで、フロイド的作品解釈に多少親しんだ人の中には、「結構でした」といってひき退る人があるに違いない。

というのは、フロイド的作品解釈は、たいていの場合、論者が何もかも精神分析の枠にはめこんで割り切って論じるために、論旨が見えずいて、諸者の知的共感を呼ばないからである。「性欲」や「抑圧」だのが、つぎつぎと極めてメカニカルに作中人物の行動を説明し、作品の状況を論じてゆくと、読者は、文学作品が精神分析の実験台となり、生身の人間だった筈の作中人物がアルコール漬の資料と化したように感じる。Crews の展開した作品解釈や人物論も、かりに一つ一つを切りはなしてしまえば、決してその例外ではない。しかし、この書物の価値は、Hawthorne の作品をほとんど網羅してフロイド的解釈を施し、その解釈を総合し体系づけて作家 Hawthorne の意識の世界と無意識の世界の二元性を論じたところにある。

およそどのような文学作品でも、人間が関係している限りフロイド的解釈は成立する。従って、数多い作品を発表している作家の短篇作品一つだけを取りあげてフロイド的解釈で論じたような小論は、それぞれ「結構でした」の一言で片付けられてしまうような独善性の危険がある。

フロイド的作品解釈の効用は、作品の implication の豊かさを証するばかりでなく、作品の背後の闇にかくれた作家の精神を浮きぼりにするところにある。従って、たとえ短篇でも、いくつかの作品を取りあげ、共通する問題をひき出してこそはじめて意義が出てくる。Hawthorne は、すでに、彼と親しかった Herman Melville が評したように、小春日和的な暖い、明るい一面と、暗いおそろしい冷い一面を持ち合わせている。この二つの面の本質を追求し、性格を異にする二面が一人の作家に共存している事実を釈明するには、当然、無意識の世界に光をあててみることも大い

に参考になる。これまで、Hawthorne の作品に対して精神分析的解釈を下す試みがなかった訳ではないけれども、いずれも単発的で、総合性に欠けていた点を Crews ははじめて補ったわけである。その意味で、Crews が描き出す Hawthorne 像の是非はともかくとしても、彼の書物が一読に価する書物であることは疑えない。

さらに、Hawthorne の研究と批評にみられる最近の傾向にてらしてみると、Crews の書物には、また新たな興味がある。Hawthorne 研究は、19世紀中頃以降の英米における作家研究の型通り、次のような大きく四つのタイプにわかれる形で展開してきた。すなわち、

I 伝記と作品論と作家の評価を織りまぜた Critical, Biographical Studies (たとえば、G. P. Lathrop, 1876; Henry James, 1879; M. D. Conway, 1890; Newton Arvin, 1929; Mark Van Doren, 1949 などの著作) と、

II “客観的” 資料に準拠した Biographical Studies (R. Stewart, 1948 や Hoeltje, 1962 の伝記など)

III 作品を主体にした研究 a. 作品の分析批評を特色とするもの (たとえば、Fogle, 1952; Waggoner, 1955 など) b. 作品論から総合的な作家論を指向するもの (Matthiessen, 1944; Von Abele, 1955)

IV 特定のテーマを標榜する研究 (たとえば、L. S. Hall, *Hawthorne, Critic of Society*, 1944; L. J. Fick, *The Light Beyond*, 1955; M. Bell, *Hawthorne's View of the Artist*, 1962 など) の四つである。

1964年は Hawthorne の没後百年にあたり、Hawthorne を記念する催しや出版物がアメリカのマス・コミをにぎわした。と同時に、この年を間にはさんだ前後の年には、百年祭との直接の関係をうたわないまでも、Hawthorne に関する書物が随分と刊行され、再版・再発行を含めると、手許にあるだけでも、10冊をこえる書物や選集が発行された。これらの刊行物

は、大別すると、三つのグループを形成する。

その一つは、批評論集である (*Hawthorne Centenary Essays*, と “Hawthorne Centenary Issue,” *NCF*, とともに1964年刊と “Twentieth Century Views” の中の一冊, A. N. Kaul ed., *Hawthorne: A Collection of Critical Essays*, 1966年刊)。これらの論集は、20世紀に入ってから今日にいたるまでの、Hawthorne に対する関心と理解の一応の俯瞰を与えている。

Crews の著書と関連して関心が向けられるのは、書きおろしの著書の刊行であって、第二のグループは、先のⅢに属するタイプの作品分析を主体にした書物である。すなわち、1963年には H. H. Waggoner の *Hawthorne* (1955年初版) が *The Marble Faun* を論じた部分を大きく書き改めた改訂版となって出版され、1964年には R. H. Fogle の *Hawthorne's Fiction: The Light and the Dark* (1952年初版) が “My Kinsman, Major Molineux” と “The Birthmark” を論じた二章を加えて再版された。さらに、この二著ほど総合的でないが、Hawthorne の悲劇性に視点の焦点をしばらくながらも、分析批評的な方法で作品論を中心に論旨を展開した R. R. Male の *Hawthorne's Tragic Vision* (1957年初版) が、やはり1964年に、Norton Library の paperback に加わっている。

この種の分析批評においては、これらの書物の初版が発行されてからも、個々の作品の分析を試みる小論があとをたつことなく雑誌等に発表されたにもかかわらず、新刊書としてまとめて刊行されたものはない。百年祭前後では、上に示したごとく改訂版・再版が刊行されたのである。つまり、個々の作品の分析に異論・反論が出てくるのは当然だとしても、Fogle, Waggoner, Male の三著は、長篇と重要な短篇いくつかの分析をまとめている点で、すでに1950年代の半ばにおいて、分析批評のピークを作りあげてしまったとみなすことができる。別の言い方をすれば、分析の方法そのものに何らかの新しきがない限り、彼等を凌駕することは不可能だと言い切れないまでも、彼等の著作を押えて分析批評の新刊を世に問うことは困難である、ということができよう。まして彼等の書物が再刊されてからではなおさらであろう。

1965年に Terence Mertin が Hawthorne の方法とテーマ、主要短篇と長篇の作品論を各章にふりわけて論じた書物 *Nathaniel Hawthorne* を発表したに

れども、この書物は “Twayne's United States Authors Series” の一冊として比較的平凡な概説に終わってしまっている。特に分析的でもなければ、そうかという評価の上で格別の新しい意見をもっているというでもない。作品論、作家論がありきたりの方法では行きつまっていることを如実に示す一例といえよう。

百年祭前後にあらわれた Hawthorne 研究の第三のグループは、先のⅣに属するある特定テーマを追求する特殊研究であって、すでに過去のいくつかの例が示すように、多様なものが集っている。再発行された書物では、Leland Schubert, *Hawthorne, the Artist; Fine-Art Devices in Fiction* (1944年初版, 1963年再刊) と Jane Lundblad, *Nathaniel Hawthorne and European Literary Tradition* (1947年初版, 1965年再刊) の二つが眼にとまるが、新刊としては、三点もの著作が出版されているのが興味深い。すなわち、1963年に出版された J. K. Folsom, *Man's Accidents and God's Purpose; Multiplicity in Hawthorne's Fiction*, 1965年にそれぞれ出版された R. J. Jacobson の *Hawthorne's Conception of the Creative Process*, H. G. Fairbanks の *The Lasting Loneliness of Nathaniel Hawthorne* である。

つまり、百年祭前後の Hawthorne 研究では、Ⅲの作品の分析中心の Hawthorne 論には新しいものがなく、再版ものが中心であり、Ⅳに属する特殊研究では、再版のみならず数点の新刊が出たのである。分析批評が、上にふれたように、何らかの新しきを持たなければ刊行が困難であり、伝記的研究(Ⅱのタイプ)が Stewart, Hoeltje などが描き出した比較的明るい Hawthorne 像を否定する決定的きめ手を欠き、計画されている手紙の出版と Notebooks の改訂版の発行を何となく待っているような現状からみると、Ⅳの分野の特殊研究では、まだまだ多くの研究があらわれてくる可能性がある。基礎的な研究を含めて、まだ手をつけていない大きな研究テーマ(たとえば、Hawthorne に及ぼされた影響〔Spenser, Shakespeare, Milton, Bunyan など〕の実証的総合的研究、人と作品における「自然」、Puritanism との関係の総合的研究など)がいくつかあるからである。

ところが、そう言うものの、この種の研究は、研究対象になった特定テーマのみに関心をむけるために、文学の最も基礎となる作品そのものの全体性がとかく犠牲にされる危険がある。たとえば、H. G.

Fairbanks の Hawthorne における孤立、疎外の研究（上掲）が、網羅的なものであるにも拘らず、今一つ物足りなさを感じさせるのは、やはり作品の全体性を破壊したところで議論が展開するからである。

Hawthorne のすぐれた作品は implications に富み、ambiguity にあふれていて、なにをとりあげるにしても context や作品の全体性が、特に、問題になる。この点への配慮がない議論は、作品の表面をかすめているに過ぎないとの印象を与えてしまう。だから、特定テーマを掲げるⅣのタイプの研究は、作品の context をどう処理するか の困難さと常に直面し、これを打破する方法論を開拓してゆかねばならない。

Crews の *The Sins of the Fathers* が浮び上がってくるのは、このような Hawthorne 研究の近況とその問題点を前にしてである。Crews の書物は、Hawthorne の作品を精神的に解釈して、Hawthorne の無意識の世界を明るみに出そうとする。つまり、Crews はフロイド的解釈によって作品を分析した作品論を積重ね、その総合から、Hawthorne 自身の obsession を追い求め、彼を評価しようとするのである。

従って、彼の書物は、1950年代にピークに達しているいはじめての新しい分析批評の試み（Ⅲ-a に属する）であり、それと同時に、Hawthorne の深層心理を追求する研究（Ⅳに属する）でもあるといえる。Ⅳのタイプの特種研究がとかく作品を分解して context を断片化したところで作業を開始するのに反して、Crews はあくまでも作品の全体性に立脚して論述する。Crews の著作は、精神分析の立場から一貫してほとんどの作品を分析するという分析批評を一步進めながら、なおかつ Hawthorne の obsession 研究を作品の全体性をこわさずにまとめた点で、あとで触れるように多少の疑義はあるにしても、百年祭を中心とする Hawthorne ブームのしめくりにふさわしい業績であるといえることができる。

Crews が結論として描き出した Hawthorne 像は、極めて簡単にいえば、心理的に非常に鋭敏で、無意識と意識の間に大きな葛藤を経験している人物像である。その意味では、Crews は Stewart, Hoeltje の伝記が描いた Hawthorne 像——本質的に何ら暗いかげにとりつかれていない、穏やかな正統的信仰のモラリスト——そして、この Hawthorne 像は、彼の作品の symbolism を詳細に分析した Fogle, Waggoner 達も認めるものだが——に烈しく反対する。

Crews は結論からみれば、Herman Melville, Julian Hawthorne, Mark Van Doren などの Hawthorne 観の骨核となっている二元論を支持する立場に立っている。この二元論は、見方によって微妙な相異があり、時には社会人家庭人としての Hawthorne と作家としての Hawthorne という組み合わせをとることもあり、また、穏和な、正統信仰のモラリストと懐疑的な孤独の人、あるいは、日光の輝きにてらされた明るい人と恐るべき暗闇の黒さにとりつかれて沈思する人、などさまざまにとらえ方がある。

Crews の二元論は、一方では、明快さとモラリズムに親しんでいる読者を満足させようとする一面を設定し、他方、“keep the inmost Me behind its veil” と願い、自己の殻の内で他に害を及ぼすことのない、無責任なとりとめのない空想をたのしむ面を設定する。この Hawthorne のいう “the inmost Me” が実質的に何にとりつかれていたかを、Crews はいくつかの作品の心理的分析から説明して、incest, Oedipal fixation, patricide, masochism などが認められるという。従って、このようなものにとりつかれた “the inmost Me” は、当然彼の時代としては、恐るべきものであり、あからさまに読者に示し見せることは許されなかった。Hawthorne の作品はこれらの暗い、恐ろしい、抑え難い自我の欲求の「昇華」(sublimation) であるという。

フロイドによれば、創作活動はすべて作家の無意識界に抑圧された欲求の「昇華」であって、Crews もこのフロイド説のパターンを Hawthorne にあてはめたのに過ぎない。しかし、その適用は必ずしもメカニカルでなく、読者の興味は “the inmost Me” を意識的・無意識的に常にかくそうとする二元的な Hawthorne 像に向けられるのみならず、Crews の展開する詳細を極めた精緻な作品解釈の積重ねにも、また、Hawthorne の作品の特色として批評家・研究者が必ずといってよいほど言及する “ambiguity” の理解にも向けられる。

かって Yvor Winters が “a formula of alternative possibility” と表現し、Matthiessen が “device of multiple choice” とよんだ Hawthorne の特色は、単なる技巧の問題ではなく、彼の文学の本質となる方法、あるいは、態度、の特色であって、Fogle, Waggoner あたりから “ambiguity” という表現で言いあらわされることに定着したようである。

Crews は、Hawthorne の典型的な物語では、かぎ

りたてて読者に供される “sweet moral blossom” と物語の実質を構成する “human frailty and sorrow” との間に、かきむしるような不協和があることに注目し、作品の奥底に深くひめられた incest, patricide, masochism といったテーマに対して、ひかれる気持とおそれる気持の間のテンションが、いわゆる Hawthorne の “ambiguity” となってあらわれていると論じる。従って、Crews によれば、“ambiguity” とは作者の心理における ambivalence に外ならない。Crews のこの ambiguity=ambivalence の図式でもって、Hawthorne の “ambiguity” のすべてが説明しつくされるとは思わないけれども、“Rappaccini’s Daughter” や “Young Goodman Brown” あるいは “Roger Malvin’s Burial” などの作品について、この図式によって興味深い解釈が成立することは認められよう。ここに一つ一つ紹介する余裕はないけれども、Crews はこれらの短篇のみならず他の多くの作品について面白い解釈を試みている。

すでに上に触れたように、Hawthorne の作品全体にわたって精神分析的アプローチを試み、作者の無意識の世界に光をあててみることは、Hawthorne の理解にとって大いに参考になる。だが、作品の精神分析的解釈から作者の無意識の世界に入りこんでゆく以上、仮空の作品に基づく推論のよろさをどう処理するかという困難さを克服しなければならない。たとえば、「昇華」作用の結果創り出された作品があるにしても、すべての作品がそうであるとは言い切れまい。

従って作品と作家を「昇華」作用で結びつけることは、かなりの傍証が必要ではなかろうか。Crews は精神分析の方法によって作品解釈を押し進めることを、くどいほど弁護しているが、この自己弁護は必ずしも作品と作家をつなぐ推論のよろさ——フロイドの芸術論そのものにも認められる傍証のないよろさにも通じる——を支えることにはなっていない。

また、作品の精神分析的解釈から作者の無意識の世界の解明へ進む際に、なぜ Crews は短篇作品の創作年にもとづく序列に厳密な考慮をはらわなかったのであろうか。その為たとえば結婚直後に書かれた一連の作品に共通する特色が見失われている。また、Notebooks の記述と実際の作品との関係になぜもっと綿密な注意をはらわなかったのであろうか。さらに、手紙類の決定版の刊行が待たれているというものの、なぜ手紙類を資料として多く用いることをさけたのであろうか。

このような疑問があるにしても、彼の試論は provocative である。読者は Crews が屢々展開する自己弁護のくどくどしさに悩まされながらも、彼の描いた Hawthorne 像にいどみたくなる衝動を強いられる。その意味で、今後この種の精神分析的な観点からの総合的作品解釈や Hawthorne 解釈が、Crews への反論・異説として現われてくることを大いに期待したい。Crews の書物は充分その刺戟となる意義をもっているといえよう。(同志社大学文学部助教授)

Mark Twain: The Fate of Humor.

By James M. Cox. Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1966.

那 須 頼 雅

Mark Twain の人間形成における重要な要素として忘れてならないのは、彼が Gilded Age の子であり、“gilded life” を軽蔑しながらも、その圏内から抜けきれなかったという点である。彼が一方では喧しく道徳的せんさくを押し進めながら、他方では金銭欲のとりこになった宿命を、我々は見落したり、漠然とうけとったりしてはなるまい。もちろん、Bigelow Paine の権威ある伝記を始めとして、Van Wyck Brooks の *The Ordeal of Mark Twain*, あるいは、Bernard

Devoto の名著 *Mark Twain’s America* など、この事実を我々に注目させる書物には事欠かぬとも言えるであろう。しかし、最近数年間に出版された Mark Twain 研究書には、「新批評的」な分析批評が余りに広く根をおろし、いたずらに奇をねらう Mark Twain 批評が目立つように思われてならない。

この意味で、James M. Cox 教授の新作 *Mark Twain: The Fate of Humor* はまさに我々の待望の書と言うべきであろう。教授に依れば、Nevada での